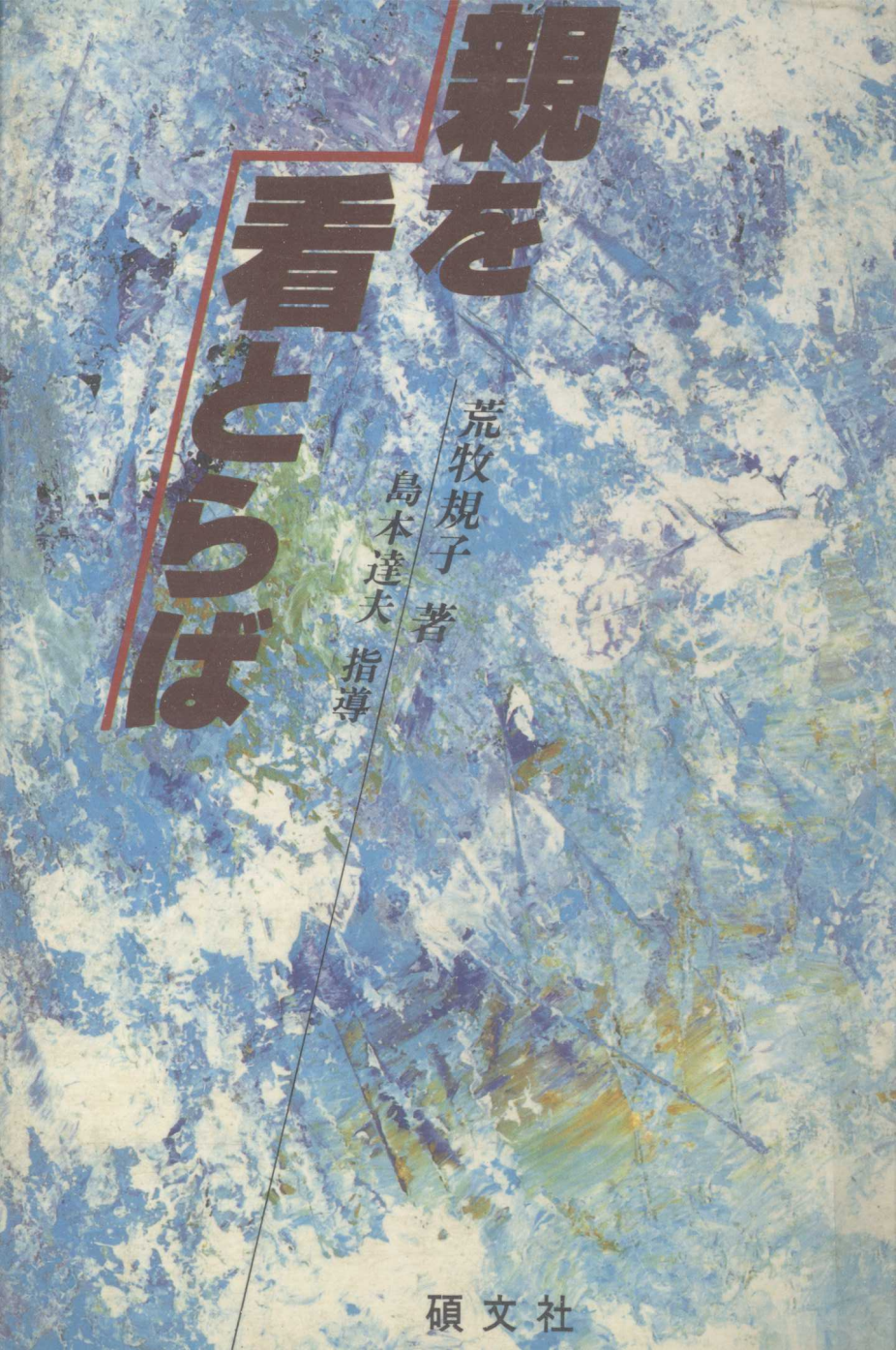




親を 看とらば

荒牧規子 著

島本達夫 指導

碩文社

視を 看とらば

荒牧規子 著

島本達夫 指導

碩文社

親を看とらば

定価 1,200円

1981年5月1日 第1刷発行

著 者 荒 牧 規 子

発 行 者 小 松 彰

発 行 所 株式
会社 碩 文 社

〒165 東京都中野区新井1丁目1番5号

電話 03(389)5571 振替 東京1—49921

発 売 元 東京官書普及株式会社

〒101 東京都千代田区神田錦町1丁目2番地

電話 03(292)2671

©Noriko Aramaki 1981

印刷 三晃印刷株式会社

目次

はじめに 7

母倒れる 12

オシッコが出た 14

十年間の記憶が消えた 16

ころび始める 18

二度目の発作 20

沸騰ヤカンを足に 22

突然おかしなことを 24

あてもなく歩き始める 26

四人目が思い出せない 28

目がうつろに 30

視力の衰え 32

夜中に起き出す 34

電話リレー方式	36
前の日の記憶すらない	38
くり返して記憶を呼び戻す	40
母は強し	42
風呂がまたげなくなった	44
逆さことばが始まった	46
一口おにぎり	48
日本酒のコーラ割り	50
トイレで立てない	52
やたらに開け放つ	54
“就寝儀式”が始まった	56
死後の世界を口にした	58
底意地の悪さが目立ってきた	60
自分の仕事を生きがいに	52
花見で失禁	64
ウソと隠しグセが始まる	66
娘の姿がないと不安がる	68

身近な死にショックを受ける 70

カネ使いが荒く 72

来客のあとひどいボケ 74

イタズラ? が始まる 76

タレ流し 78

フトン四組を敷きつめる 80

別人になった 82

イラ立ちが目立つ 84

さがしものを始める 86

最後のふんばり 88

気力が衰えだした 90

親子以外はダメ 92

電灯の光がないと 94

誇りを傷つけられ 96

覚悟の絶食 98

歌声に起きた 100

アイスクリーム一口 102

昏睡状態に

104

仮死状態から蘇生

106

バナナを食べる

108

食欲を盛り返す

110

夜の散歩に出る

112

電話をやたらにかける

114

看病疲れ

116

ひょうそう

118

一人になりたがる

120

演歌が聞きたい

122

手が伸びない

124

おシリにセン

126

欲をなくす

128

生き仏に

130

もう終わり

132

髪の手入れ

134

寝返りがうてない

136

ベニヤ板で寝返りができた
138

電話のベルを気にする
140

トイレへ再び行き出す
142

ハシを使わなくなる
144

お見舞いは迷惑
146

肩こり薬を体に塗る
148

テレビを見なくなる
150

正気に戻った一瞬
152

死の旅支度？
154

ベッドに移す
156

雨を喜ぶ
158

口をきくのがおつくうに
160

最後のあいさつ
162

死臭が立った！？
164

母にかわって選挙に
166

歌にマユをひそめる
168

冷くなった
170

対談

老人介護の現場から

173

援軍なしでは介護できない

174

老人介護は、個人の幸福追求とは矛盾するか

177

家庭と行政の連携プレーで

179

国が乗り出すと税金が高くなる

182

あとがき

参考文献

189 185

はじめに

「一緒に死ぬのよね？ 親子」「ええ、もちろん。一人では死なせやしないわよ」

あんなに固い約束をしたはずなのに、私はまだ一人でおめおめと生きています。でも死ぬ間際、あなたはまるで私をつき放すように、そして私がついてくるのを断わるように何度も言いましたね。「さよならなんですよ」と。そして八十歳の誕生日を半年前にして逝ってしまいました。

クモ膜下出血で倒れて以後十四年間、できる限りの知恵をしぼって、つきっきりで看病したつもりですが、あなたがいなくなってしまったあと、私は「看病の方法が間違っていたのではないだろうか」「もっとかしこい人がお世話していたら、もっと長生きできたのではないだろうか」と次々と後悔に襲われました。そして毎日、泣いて暮らしていました。このままでは病気になるってしまふ——と心配してくれた妹や友人達が「お母さんの追悼リサイタルを開いては……」とすすめてくれたのです。あなたの八十歳の誕生日になるはずだった五十四年九月一日に、あなたの写真とお骨（コツ）をステージの中央に置き、二度と私の舞台を見ることができなくなったあなたのために絶唱しました。あの時の私の声、お耳に届いたでしょうか……。

会場にはご近所の皆様が大勢来てくださり、一緒に泣いてくださいました。その中の一人、サンケイ新聞婦人面の記者、辻田ちか子さんのすすめで、その後一年半にわたり婦人面に「親を看とら

ば”のタイトルで、あなたと二人っきりで暮らした十四年間のことを書きつづりました。“恥”を承知の上で、あなたと私二人の病氣とのたたかい、老いとたたかい、あるいは介護の知恵をお知らせすることによって、同じような境遇にいらっしゃるどなたかのお役に立つものなら……とプレイバシーをすべてさらけ出すことを承知したのです。許してくださいませね。

連載中から、「手元に長く置いておきたいから、是非本にして欲しい」という声がたくさんあり、連載終了と同時に、本になることになってしまいました。病氣の母親を看護することなど、娘として当然のことなのに、新聞記事になったり、本になったり……私は思いもよらないできごとと少々面くらっています。今のお若い方々、あるいは今若いというだけで必ずお年寄りになる方方のために何かのお役に立てるのならこんな嬉しいことはありません。お母さん、あなたもきっと同じ気持ちですわね。

あなたの娘として、この世に生まれて、大切に此の上もなくあたたく育てていただきました。オペラ歌手になってからも、あらゆるあと押しもしていただいて本当に幸せでした。

あなたが倒れてからは、本当に二人きりで、びったりくっついて暮らしましたね。辛いことも多かったけど、私はあなたの看病が心ゆくまでできて、しあわせでした。本当にありがとうございました。

だれに言いましてもわかってはもらえないことですけど、私はこの世の中で一番尊敬し愛し、慕い続けて来た、たった一人の人間が母なのです。だれだって好き嫌いはありますし、人によっては

「お母さん嫌い」などと本気になっていう人にも会ったことがあります。それはそれでよくわかります。『相性』とでもいうのでしょうか？ 私は小さい時から何としても母が好きで仕方がなかったのです。母ほど力強く、また母ほど心のあたたかい、そして心のひろい、また面白い女性をいまだ私の人生五十七年の間に会った事はないのです。

私は病身で十三才ぐらいまでは寝てばかりの生活でした。『自家中毒』というむつかしい病気で小学校などのはべで三年半ぐらい通学出来たでしょうか。母はその長い年月を私を抱きしめ難病とたたかってくれたのです。私が健康になり、「力」も強く気性も母そっくりになりましたのは病氣中の母のスキップではなかったのかと思います。

母が倒れ、私はそれまでのオペラ歌手としても、またシャンソン歌手としての仕事も全部捨てたのです。あたり前のことですけど、それが世間ではあたり前ではないらしく「お母さんを病院に入れてあなたは歌手生活を止めるべきではないわよ」という声が私の周りのあらゆる人達からおこりました。

しゃれたドレスを着て厚化粧して、たとえばすばらしく『愛の歌』を唄ったとしても、家の中で母親が、それもこの世で一番大切な母親が、だれかのめんどくさそうな世話を受けている事などは私には考えられませんでした。私はそのようには育てられなかったのです。歌を捨てることなど何でもなかったのです。心がこもってない、心に愛の燃えるほのおがない様な歌を唄っても仕方がないのです。歌こそ肉体の奥の奥から愛の叫びを人々に呼びかけるのが本当ではないでしょうか？

私は母のそばにすっかり根をおろし、母の様子をずーっと見つめ、母の役に立つ娘である事、母が「困ったなー」と思った時に、すぐにお手伝い出来る娘でいたかったのです。

朝から晩まで私達母娘は一日中会話をし続けました。毎日同じ言葉ですけど。「お母ちゃまー姫リンゴが咲きましたよ」「あーそうねえ。きれいねえ」「お母ちゃま、リラですよ。五月ですなー」「そうねえー。もう五月ね」という様な単調な会話です。ですけどあきることにはなかったのです。

私は母を残して昭和三十五年にブラジルに渡り、サンパウロで五年間も歌う仕事をしていたので。その間に何度も帰国しましたけれど、やはり私という、絶對的に母の味方である娘が、自分をおいて外国に何度も行っていたことは、晩年の母にはどんなに淋しかったことでしょう。

私はくやしいのです。八十歳位までしか生きない母とわかっていれば、私は外国なんぞに歌いに行きはしなかった。ずーっと母のそばを離れずにくっついていて、あれこれ、何かと役に立ってあげたかった。ぐりぐりとだとはわかっています。でも、私だけじゃない。世間のいろいろの事情の人々が、親を看たくても看られないで、人知れず泣いていらっしやるに違いない。その方々に比べれば、母のそばで母の好きな様に、長い間尽してあげられたことを幸せに思わなければいけないのでしょう。

でも結婚しなかった私には母の様に、そばについて心から看病することを喜んでくれる娘はいないのです。だから生きているかぎり、親を大切にすることが、また親が病氣になったら、心をこめて看病することが、この世の中で一番とおといことであり、また年老いて「力」^{チカラ}をなくした人を

「看とること」は此の世で一番すばらしい行為オウナイであり、何よりもどんな「幸福」そうに見えることより、そのあたたかい心の持ち様が、その人自身にとっての人生観の解決になるのであり、本当に疑いもなく至上の幸福であることを私は言い続けて行きたい——と思うのです。

この本は、サンケイ新聞婦人面に五十四年十一月八日から、五十六年四月十六日まで連載した「親を看とらば……」に、一部つけ加えてまとめたものですが、私の日記の部分は、最初の数行だけでして、あとは日記を読みなおし、当時を思い出しながら「お年寄りの介護の知恵」を中心に私がやってきたことを回想して書いたものです。

最後になりましたが、学問的な愛情のこもった御助言を毎回頂きました日産玉川病院の島本達夫先生、かわいらしいさし絵を描いて下さった前野はるみさん、長い期間婦人面をお貸しくくださったサンケイ新聞社の皆様に厚くお礼申し上げます。

五十六年四月

荒 牧 規 子

母倒れる

〔昭和四十年十一月十五日〕

すごく寒い夕方、外から帰ってきた母、突然倒れる。クモ膜下出血と診断される。



民生委員をしていた母（六六）は、共同募金の集まりから、顔を少し赤くさせて帰ってきたとたん、ヘタヘタッと畳に寝ころんでしまった。「どうしたの？」と聞くと、苦しそうに顔をゆがめて「うるさい」と一言。今まで、そんなきついことばを言ったこともなければ、着替えもせずに寝たこともない母なので、これは一大事と直感した。赤かった顔が（あとでわかったことだが、会合でワインを飲んでいた）、そのうちに青くなり、歯をギリギリきしませ始めた。こどもの引きつけと同じ症状で、とっさに舌をかむといけなないと、歯をこじあけて、ティースプーンに綿をかたく巻いてさし込んだ。そのうち胃の中のものを吐き出した。吐いて楽になったせいか、「オシッコ」といって立ち上がったので、ホッとして一人で行かせ、私は主治医へ電話をかけた。

長年かかりつけている医者はいにく留守だったが、母はこの人しか診てもらわないと日ごろから主張していたので、他の医者を探すのはやめて、主治医が戻るのを待つことにした。ふと気がつ

くと、母はトイレにはいったきり出てこない。「しまった」と、トイレへ飛んでいくと、母は便器にたどり着く前に倒れていた。失禁して、着物をぬらして倒れているのを見たとき、「ああ、あのきれいな母が、とうとうこんな姿に……」と急に哀れになってしまい「死ぬまで一生みてあげよう」と決心した。首から頭にかけて、カチカチになっていた。素人判断だけど「これは脳にきたな」と直感して、頭とそれに続く背骨は絶対動かしてはいけないと自分に言い聞かせながら、抱きかかえ、引きずるようにして、トイレから部屋へ運び込んだ。外出中の医者に連絡がつかないままに、夜十時ごろ、二回目の発作を起こした。

医者は来ない。とうとうしびれを切らして、救急車にすがるしかないとき、主治医が到着した。午前四時近くになっていた。医者は「クモ膜下出血ですね」と診断した。

ドクターメモ

クモ膜下出血というのは、ある日突然、気分が悪くなり、同時に激しい頭痛にみまわれる病気です。多くの人はお母様のように吐きます。頭を横にして寝かせたのは適切でした。程度がひどい意識が曇ります。ただ、発作が起きて、倒れるまでにある程度、余裕がある場合もあり、恐らくお母様も帰宅途中で発作を起こし、頭痛をこらえながら、家へたどり着いてから倒れたのでしょう。

目の前でケイレン発作を起こされ、一人で対処された荒牧さんはさぞかし心細かったと思いますが、直ちに医師の往診が得られない場合は、やはり救急車をお願いするべきでしょう。それにしても、午前四時にかけてくれる医師を身近に持っておられるお母様は、しあわせといっているでしょう。

オシッコが出た

（昭和四十年十二月十八日）
オシッコが出た。母本復。

入院して以来、目をうつろに開いてうわごとの言いっぱなし。大声でうわごとを言い、バカ力が出るのが、クモ膜下出血の特徴だと説明を受けたが、看護婦さんや付添婦さんを、力まかせにたたいてしまうのにはホトホト困ってしまった。私は、自宅に病気の弟と身寄りのないおじいさんを預かっていたので、昼間は病院に行けず、夜間だけ付添婦さんと交代していた。仕方なく退院を申し出ると「意識が完全に回復したと証明できるのは、自分で「オシッコする」といってから、オシッコを出すことです。無意識のうちにしているうちは、退院はさせられない」といわれた。

祈るような気持ちで、母を抱っこして、便器の前にしゃがみ込んだのは、入院して一カ月以上たった十二月十八日の午後十一時ごろ。午前三時を回って、私も抱っこしている手がしびれてくるし寒さもこたえて、あきらめかけた。「もうバカになってもいい。大丈夫よ、このまま意識が戻らなくても、ちゃんとみてあげるからね」と心の中で決心し、哀れな母を思わずギュッと抱きしめた。

